

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 122

2010/11/12

目次

2011～12 年度（第 14 期）役員選挙せまる	2
第 27 回年次大会のお知らせと研究発表の募集.....	3
第 16 回公開講演会報告「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム：中東に誕生したアブラハムの宗教」	5
第 3 回中東学会世界大会(WOCMES-3)参加報告	12
AFMA 参加報告	22
第 19 回韓国中東学会国際会議に参加して	31
『日本中東学会年報 AJAMES』編集委員会報告	31
梅棹忠夫初代会長の逝去を悼む.....	32
理事会報告	33
会員の異動.....	34
寄贈図書.....	37
事務局より	38
編集後記.....	39

2011～12 年度（第 14 期）役員選挙せまる

現在の 13 期理事会の任期も 2011 年 3 月 31 日まであと 4 ヶ月程度となり、2011～12 年度の第 14 期役員選挙をおこなう時期が迫って参りました。役員選挙日程は、以下の通りです。11 月中旬から年末年始にかけて、暫定有権者名簿（有権者は正会員となります）の送付、投票および開票作業を経て、来年 2 月上旬には、第 14 期理事会の新しい顔ぶれが揃う予定です。

会則第 7 条には、「会長は本学会を代表し、会務を総括する。評議員は会長の諮問に応じる。理事は本学会の事業の運営にあたる。」とあり、評議員を含めた役職者全員で、円滑な学会運営が行われることとなります。評議員として選任される会員も、学会奨励賞の推挙や会長からの諮問や事務局からの依頼事案に対応していただくことを期待されている重要な役職であることを改めて申し添えます。

今回の役員選挙につきまして、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

(店田廣文)

第 14 期役員選挙日程

11 月 05 日 (金)	メーリングリストによる選挙予告、学会費支払い呼びかけ
11 月 12 日 (金)	暫定有権者名簿送付
11 月 26 日 (金)	選挙権確定のための会費納入締め切り
12 月 10 日 (金)	評議員選挙投票用紙等発送
1 月 07 日 (金)	評議員選挙投票締め切り (消印有効)
1 月 14 日 (金)	評議員選挙開票
1 月 17 日 (月)	理事選挙投票用紙等発送
1 月 25 日 (火)	理事選挙投票締め切り (消印有効)
1 月 28 日 (金)	理事選挙開票、ただちに理事就任依頼
2 月第 1 週	理事確定、新旧合同理事会日程調整
2 月下旬～3 月上旬	新旧合同理事会、会長選任→事務局長選任

<役員選挙関連の会則と細則>

会則第 8 条

- (1) 会長は理事の中から、互選によって定める。
- (2) 評議員は一般会員の中から、正会員の投票により選任する。
- (3) 理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中か

- ら特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。
- (4) 監事は理事会の推薦をへて、総会において選任する。

細則 VIII. 役員選挙について

1. 理事会指名による 4 名（監事 1 名を含む）が選挙管理委員会を構成するものとする。
選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。
2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 13 名を選出するものとする。
3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

第 27 回年次大会のお知らせと研究発表の募集

前号のニューズレターでお知らせしましたように来年度の年次大会は、京都大学で開催されることになりました。大会の実施要項・研究発表応募要項が下記のとおり決定しましたのでお知らせいたします。大会は、例年通り、1 日目が公開シンポジウムと総会、2 日目が研究発表になります。会員の皆様には、積極的なご参加により大会を盛り上げて頂きたい、お願い申し上げる次第です。

開催日時：2011 年 5 月 21 日（土）・22 日（日）

開催場所：京都大学・吉田南キャンパス

実行委員会

委員長：小杉泰

事務局長：東長靖

委員：井谷鋼造、岡真理、帯谷知可、長岡慎介（以上、京都大学）、今井静、須永恵美子（以上、京都大学・院）、北澤義之、末近浩太、店田廣文、富田健次、長澤榮治、濱田正美、堀井優、堀川徹

研究発表応募要項は以下のとおりです。研究発表をお考えの方は、下記をお読みの上、ご応募ください。

1. 研究発表

研究発表を希望される方は、12 月 10 日（金）までの間に年次大会実行委員会までメール（james2011@asafas.kyoto-u.ac.jp）にてご応募ください。その際、下記の点をお知らせください。

- ①氏名（ローマ字表記を併記）、所属（大学院生の場合はその旨を表記）、連絡先メールアドレス
- ②発表タイトル（仮題も可）と発表のおおよその骨子（発表言語が日本語の場合

合は 400 字程度、日本語以外の場合は 200 words 程度で、内容とテーマが分かるもの。正式の「要旨」は、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。）

③使用希望機器をお申し出下さい。（プロジェクター等の台数に限りがありますが、可能な限りご希望に応えるようにします。また、パソコンは可能な限り発表者ご自身でご用意ください。）

2. 企画セッション

第 27 回年次大会では、会員による企画セッションも公募します。今大会では、国際化推進の観点から日本語以外の言語によるセッションのみ募集します。特定のテーマについてセッションの企画をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。締め切りは、研究発表と同じく 12 月 10 日（金）です。

持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含めて 1 時間 30 分で、発表者は 3 名程度とします。コメンテーター（討論者）をつけるかどうかは自由ですが、司会者は必ず 1 名必要です。発表者と司会者、およびコメンテーターはすべて日本中東学会会員であることとします。企画責任者は、①企画セッションのタイトル、②企画の趣旨（400 words 程度）、③企画責任者の氏名（ローマ字表記を併記）、所属、連絡先メールアドレス、④発表者の一覧（氏名 [ローマ字表記を併記]、所属）、⑤各発表者の発表タイトル（仮題も可）とその骨子（200 words 程度）、⑥使用希望機器、を年次大会実行委員会事務局までメールでお知らせください。司会者とコメンテーターは応募の時点で確定していなくてもかまいません。なお、調整の都合上、企画の内容について、事務局から適宜問い合わせ・ご相談をさせていただくことがあります。

3. 託児所

託児所の利用を希望される方は、大会実行委員会事務局までお申し出ください。

4. 宿泊について

年次大会の開催時期は、京都の初夏の観光シーズンと重なるため直前の宿の予約は大変難しくなります。年次大会へ参加予定の方は、十分余裕を持って宿泊予約されることを強くお勧め致します。

以上、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

連絡先

日本中東学会第 27 回年次大会実行委員会事務局

〒605-8501 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 東長靖研究室
Tel : 075-753-7383 Fax : 075-753-9641 (共用)

E-mail : james2011@asafas.kyoto-u.ac.jp

(可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです。)

(小杉泰)

第 16 回公開講演会報告「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム：中東に誕生したアブラハムの宗教」

2010年7月17日、土曜日、(午後13時30分～17時30分)、東北大学川内キャンパスのマルチメディア研究棟6Fホールにて、第16回公開講演会を開催した。アブラハムの一神教とよばれるユダヤ教、キリスト教、イスラームの各宗教の専門家(ユダヤ教：市川裕氏、キリスト教：山形孝夫氏：イスラーム：小田淑子氏)をお迎えし、これら三宗教の特徴について解説していただくとともに、これら三宗教の共通点や相違点などについてご説明いただいた。

講演会は、最初に各講師が50分ずつ講演し、その後、講師全員が登壇し、受講者からの質問に答えながら、これら三宗教の共通点や相違点を明らかにするという形式にした。4時間に及ぶ講演会であったが、いずれの講演も大変に充実した内容で参加者を魅了したと思う。

当日は、3連休の初日で、天候にも恵まれたために、来場者数が伸び悩むのではと心配したが、70名あまりの参加者を得ることができた。配布したアンケート用紙(回答者数32名)によると、参加者の半数は、東北大学の大学生や大学院生、残りは社会人の方々だった。講演会開催情報の入手先は、ポスターやチラシが28%、授業での紹介が25%、知人・先生から紹介が34%、学会のホームページが3%であった。仙台周辺の大学、メディア、高校などに重点的にポスター、チラシを配布したが、広報の仕方については、さらなる工夫が必要かもしれない。

参加者からは、「三宗教のコラボ企画はとても良い」、「アブラハムの各宗教での位置づけなど、興味深くきかせていただきました」、「宗教が違うということは考え方のプロセスが異なると知った」、「それぞれの宗教が関連していて驚いた」、「もっとイスラームについて取り上げてほしかった」、「大変分かりやすく刺激的であった」といった感想をいただいた。また、企画のあり方については、「50分という時間の制約は少し短く感じる」、「町の公会堂を使用すれば参加者がふえたのでは。対談、鼎談のような形式、パネル形式も良いと思う。」といった貴重なご意見もいただいたので、今後の参考としたい。

個人的には、大学生や一般を対象とする公開講演会も重要だか、以前に比べ各大学での中東関係の授業も増えていることから、通常の企画では、参加者数を

増やすことはむしろかしいのではないかという印象をもった。対象を高校生に絞った講演会なども案外、重要なのではないかと思う。

一昨年の神戸につづき公開講演会の企画を担当するのは2回目となったが、日程、テーマ、講師、会場の選定ならびに広報など、課題は多いと感じた。今回は、会場となった東北大学の黒田卓会員、大河原知樹会員にあらゆる局面で助けていただき、非常に心強かった。両会員ならびに事務局の献身的なサポートなしには実現できなかっただろう。この場を借りて御礼申し上げます。(桜井啓子)

講演会の内容と質疑応答

最初に、長沢栄治会長から、公開講演会開催にあたって趣旨説明がなされた。

「日本中東学会は、日本各地で講演会を年に一度開催し、研究成果の社会還元のために努めている。中東は、日本人にとって地理的、心理的に遠い位置にあるが、いわゆる一神教としてのユダヤ、キリスト、イスラームという3つの宗教が発祥した地であり、世界の歴史におおきな影響を持つ。今回、キリスト教徒の殉教の歴史など、日本列島の中で一神教の世界と特別の関係のある東北の地で、このようなテーマを開催することは重要な意義があると考え。」

次いで、発祥の歴史的順序に従い、ユダヤ教、キリスト教、イスラームに関する講演が行われた。

《ユダヤ教の二つの流れと現在：ダビデとモーセ》 市川裕

本講演では、ユダヤ教の古代から現代までの変容が主題となった。

日本では、ユダヤ人に比し、ユダヤ教は知られていない。ユダヤ教の司祭(ラビ)は、「ユダヤ教とは幼子に対する母親の手のようなものである。母(神、即ちユダヤ教)の手を握っていれば、どのような境涯においても生きていける。」と言う。ユダヤ人は、古代から国を失い、諸国を変転し、3000年の流浪の歴史を有するが、時代によって有力な思想が異なるので古代、中世、近現代という3つの時代の変化に沿って特徴を見たい。

古代(紀元前1000年から紀元後500年まで)には、紀元70年を境に、ダビデ的宗教からモーセ的宗教へと転換を遂げた。ダビデ的ユダヤ教とは、メシア(超人間的指導者)は古代イスラエル王ダビデの家系にあり、王という存在を重要視する。王は、アブラハムが神と契約したことによって土地を持ち、土地に基づく理想としての独立国家が成立する。すなわちダビデはエルサレムを征服し、息子ソロモンが神殿を建てる。その地は、アブラハムが息子イサクを神にささげようとした聖なる岩が中心となった。

ローマ軍の侵攻を受け、70年に神殿を失ったことを機に、モーセ的ユダヤ教へ

と変容し、旧来のメシア思想に基づくダビデ的ユダヤ教は、キリスト教へと継承されていく。モーセ的ユダヤ教とは、生活全体が神の啓示法（ハラハー）によって規定されるという点で、むしろイスラーム教との共通性を持つ。土地に依存しない宗教共同体が成立し、離散社会を生きるユダヤ人を支えることのできる宗教に変容した。

中世には、イスラームの登場とともに、地中海周辺が完全に一神教化した。ユダヤ人は、キリスト教世界、イスラーム教世界の両方に、異邦人として住んだ。地域別のユダヤ人社会ができ、ドイツ、フランス、イタリア地域ではアシュケナジ、スペイン地域ではスファラディ、中東ではミズラヒと呼ばれる。近世には国際関係変化により、アシュケナジのポーランド進出、スファラディのイスラーム社会への移動があるが、ハラハーに基づくモーセ的ユダヤ教は離散社会で継続して発展した。

近現代においては、西欧近代主権国家の誕生とともに、ヨーロッパにおいてユダヤ人の身分に大変化が生じる。近代は、神の権威に拘束されない社会となり、国家と宗教の問題が変容した。しかしながら、そこには2つの近代国家像があった。

一つは、19世紀フランスのアトム(原子)的自由主義国家観で、国家を自由平等の個人から考える。すなわち個人が自由、平等、友愛を持って関係性を築き、信教は自由だが個人の内面の問題とする。それまでキリスト教社会にとって異邦人であったユダヤ人が、国家を築くアトムへ変容し、ユダヤ人の自治（ハラハー；人と人との関係を律する法）を放棄しながら、宗教はユダヤ教であることによって神と人との関係は昔のまま維持する立場をとる。

もうひとつは、19世紀後半のドイツ語圏を中心におこった、有機体的全体主義国家観で、国家を言語と民族から考えるものである。人種としてのユダヤ人はセム語族で、異民族であるとし、国家は同一民族によって構成されなければいけないという潮流が生まれイスラエル建国へと至る。

ユダヤ教は、近代までは宗教民族共同体であったが、近代における異なる2つの国家観を通して、2つのあり方を生みだした。ユダヤ教は宗教だとし、アメリカを中心に各国の市民として生きる人々が1千万人、ユダヤ人を中心としたイスラエルに600万人である。そこには、中世以来のモーセ的ユダヤ教を実践する超正統派の人々、モーセ的宗教を守りつつ、イスラエル国家を宗教的に支持する人々もいる。

《イサクの犠牲とキリストの十字架》 山形孝夫

本講演ではアブラハムのイサク物語を通して、ユダヤ教とキリスト教の相違と関係性が考察された。

旧約聖書創世記にはイスラエル民族創始の物語として、紀元前 20 世紀にユダヤ人の始祖であるアブラハムが、ウルから出発し、バビロン、マリを経てハランへと羊を連れて旅する遊牧民的生活が描かれる。アブラハムは、神の大いなる幻（約束の土地）を目標に移動を続ける。アブラハムと妻サラの間に子供はいなかったが、最愛のものをささげますから子供を授けてくださいとの祈りに、神から息子イサクを授かる。しかし、最愛の子イサクを神にささげねばならない状況に至る。彼は、妻には告げずに 3 日 3 晩歩いて犠牲の山へ進み、イサクと二人で山に登る。アブラハムが神にイサクを捧げるため、手を下そうとする。そこに 1 頭の牡羊が現れ、はふりの儀式を行うという物語である。

第一に、この物語の解釈には 2 つの解釈が試みられた。一つには、人身供儀から動物供儀への転換、もう一つにはアブラハムに対する神の大いなる試練が表わされているとする。しかし、これらはキリスト教的解釈であって、ユダヤ教的解釈によれば、アブラハムだけでなく自分を縛らせた息子イサクに焦点をあて、イサク縛り(アケダ)としてイサク殺しが回避されたことが重要な救済物語の意味を持つ。

第二に、キリスト教に拠れば、犠牲の子羊は神の子羊であり、神の子羊、すなわちイエスはモーセに優る新しい契約のしるしとみなされる。キリストは罪を贖う唯一の生贄で、過去におけるすべての生贄に代わる一回限りの永遠の生贄となった。

第三に、犠牲の子羊の意味が、中世に入ると変容する。ローマ皇帝コンスタンティヌスが、キリスト教を国教化し、「ひとりの神、ひとりの帝王、ひとつの帝国」という統治理念を適応した時、神への信仰と皇帝への忠誠と帝国への献身を「犠牲」という一本の線で結ぶ一元的な聖戦思想のイデオロギーとして「犠牲」が機能するようになる。そこでは、ダビデ王によるイスラエル王国がモデルとなった。

第四に、国家統治の理念としての権力機構に取り込まれたキリスト教は、巨大な世俗主義的権力として西欧に浸透する。国策的聖戦として対イスラーム政策としての十字軍、対ユダヤ人政策を考えねばならない。

《イスラームと統治：シャリーアとトルコ共和国の世俗主義》 小田淑子

宗教学という、神道、民俗宗教、民間宗教、さまざまな宗教を含めてイスラームを見ていく立場から、イスラームの統治が考察された。

イスラームとは、3 つの一神教の中で、歴史的には 3 番目の一神教であり、クルアーン(コーラン)にはユダヤ教やキリスト教への言及がある。コーランは、唯一神アッラーがアラビア語で語った言葉で、神の言葉を聞いた預言者ムハンマドを通して人々に伝えられた。ムハンマドは 40 歳ころまでは遠隔地商人であったが、ある日突然、神の言葉を聞いた。その言葉は何度も続き、預言者としての確

信を得る。当時のアラブ人は、部族の神と先祖崇拝を行う多神教徒であったが、近くにユダヤ教徒やキリスト教徒が住んでいた。

114章のコーランには、天地創造、最後の審判、永遠の来世、過去の預言者、ムハンマドの啓示が示される。コーランは人間的であり霊的ではなく、ごく当たり前の人間がかかわることのできる宗教として説かれる。

神と人間との関係は、神からの言葉(コーラン)と法(シャリーア)が存在する。人間の身体は神が創造したもので、卑しくはないので、全員在家で独身性を強いることはない。加えて、経済活動、結婚、食べるという欲望を卑しまない。神は幾つものウンマを作り、それぞれの民族に啓示を与えた。信仰と身体は不分で、信仰共同体は生活共同体としてのウンマとなる。

シャリーアとは社会秩序を守るための法である。赦し(愛)だけでは社会は成り立たないので裁きが必要という視点に立つ。儀礼規範と社会規範から成る。法源は、コーラン、預言者の模範的言行(スンナ)、ウンマの合意(イジュマー)、コーランとスンナに基づく論理的類推(キヤース)にある。宗教が国家を包摂し、教会、聖職者がいないことに特色がある。イスラームはシャリーアによる統治を原則とした法治社会で、法体系、法学者、政治的実権者の三者によって成立する。歴史的には、諸国家がシャリーア以外のカーヌーン法や西洋法を援用し、原則を多様に適応させて成立した。

近代に伴い、西洋近代をモデルにした社会改革が行われ、2つの潮流がみられる。一つは復興主義(原理主義)で、西洋法を導入せずに、コーランの新しい解釈に基づきイスラーム的近代の達成を目指すものである。政教分離を拒否し、「コーランとスンナに戻れ」と主張する。ただし現実には、リベラルな判断なしに文字に拘泥するゆえに、極端な反近代化現象をもたらす場合もある。

もうひとつは、世俗主義で、手っ取り早い改革として西洋化を目指す動向で、ケマル・アタチュルクの推進したトルコの政教分離に見られる。西洋法、西洋暦、ラテン文字を採用した。国家から独立した「教会」は創設されず、国家の中に宗務省が存在し、国家がイスラームを管理する。実際には、伝統の基礎的枠組みが強く残るイスラームが復興し、儀礼規範に関してはシャリーアが遵守され、現代のトルコはイスラーム社会であり続けている。政教分離とは、キリスト教にのみあう制度ではないだろうか。

現代においては欧米とイスラーム世界の対立が目立つが、過去のイスラームは他宗教に寛容であったことを教訓とし、富裕な強者に、異質な文化との共存を考え政策を実行する重い責任がある。

〈質疑応答〉

講演の後、桜井啓子理事が司会を務め、活発な質疑応答が行われた。

はじめに司会者から、「三宗教が長い歴史を有し、同じ宗教の中でも多様な解釈が併存・競合しており、それぞれの宗教側からお互いをどう見ているのかというのは難しい問題である。アブラハムはイスラーム教では神は唯一であることを理解した最初の人物とされる。それぞれの宗教におけるアブラハム観とはいかなるものであったのか」との問いがあった。それに対する回答は、以下の通り。

「ユダヤ教において、アブラハムは父祖であり、血縁上最初の人という位置づけがなされる。彼は神と言葉を交わしたが、他の民族に対する啓示は受けていない。一方、モーセは人間に対する啓示を受けているので、位置的にはモーセが高く評価される。イサクは自ら殉教していく人と宗教詩にうたわれ、中世ユダヤ教におけるアシュケナジの迫害に際して、殉教を覚悟するする人のモデルとなったのであろう。」(市川)

「キリスト教におけるアブラハム像は、前述のアブラハムのイサク物語に込められる。キリスト教のユダヤ教とイスラーム教に対する違いは、イエスの位置づけにある。キリスト教の場合、イエスははただの預言者ではなく、目に見える人格としての神であり、言葉ではないイエスの行為、即ち十字架に架かるという愛が重要な問題である。言葉だけのユダヤ教やイスラーム教とは異なる点である。」(山形)

「イスラームではイブラーヒームと呼ばれ、理想的一神教のパラダイムとしてのモデルがイブラーヒームである。同じアブラハムの宗教がどうしてこんな違いを生んだのかという点に関しては、歴史に解いてもらうしかない。イスラームは、先行一神教としてのユダヤ教とキリスト教は認める立場に立つ。」(小田)

会場からの質問とそれに対する回答は以下の通り。

質問：ユダヤ教を普遍化、乗り越えたキリスト教と考える際に、どう解釈するのか？

回答：ユダヤ教では、神に言葉を通して、モーセが掟という形の約束をした。しかし、人間はすべての掟を破る原罪を持ち、掟によって人間は救われない。神に謀反を起こした人間を救うために、改めて神と掟を結びなおしたのがイエスの贖罪である。新たな人間と神との契約が、キリストが人類に与えた愛であり、ユダヤ教の総決算とみなしうる。(山形)

すべての人類はノアの子孫であり、ノアの7つの戒律を守れば、神は受け入れてくれる。特別にあえて、モーセ5書の613の約束を受け入れたのがユダヤ人であり、自分たちが神に選ばれた民という思想をもつ。キリスト教は、この613の約束を守れない人々を救うという意味を持つ。(市川)

宗教においては「乗り越えた」という表現は使うべきではない。比較宗教学においては乗り越えということはありません。(小田)

質問：三宗教の立場から犠牲のあり方とはどうだったのか？

回答：キリスト教では、アブラハムの生贄としてのイサクは、最後に子羊がとってかわる。あらゆる犠牲のシンボルとしてのイエスの十字架があり、ミサの血と肉の儀礼で表現される。キリスト教では犠牲は消えてしまう。(山形)

ユダヤ教では、70年に神殿が崩壊した後、昔のダビデの宗教を再興しようとする人々がいた。それに反して、ラビたちは、祈り、いつくしみの行為が生贄に代わるものと解釈した。神を愛すること、すなわち神の教えを守り実行することが、自分自身を神に捧げ、報酬をあてにしないで生きる犠牲とした。もう少し広い意味での犠牲は、自分の大事なものを捧げることにあり、日常的な自分の楽しみになるようなことをやめて、聖なることのために使う。日常なことではなく神の特別な目的のためだけに働くことが犠牲であり、動物犠牲はもはやこの範疇に入らない。(市川)

イスラームでは、メッカ巡礼最後の日に当たる犠牲祭がある。神に捧げたものを人々が分けて食べる意味を持つが、イサクの犠牲や、キリストの磔刑のような、宗教的に重い意味では犠牲は強調されない。分けて食べるということが、食べることへの感謝となり、宗教と深い関係を持つ。(小田)

質問：三つの宗教を隔てさせているものは何か？それを超えるにはどうしたらよいか？」

回答：近代以前において、イスラーム世界は平等だった。それは、オスマン朝時代のイスタンブールにおけるキリスト教徒、レコンキスタで逃れてきたユダヤ教徒との共存に見られる。ビザンツ帝国が征服されオスマン帝国へと変容したが、多数のキリスト教民衆はオスマン国内に留まっていた。この問題は、神学的教義論争しても無理で、どのように共存できるかが重要である。一つのモデルは、オスマン帝国にあり、経済的優位なものが、弱いものに寛容を示すべきである。(小田)

小田氏の意見に同感、キリスト教の一方的押しつけに対する反省が必要である。聖戦(ジハード)という大義をかざすテロ、テロと戦う思想のもとでのブッシュのイラク攻撃、これらの連鎖をどのようにしてやめるのが必要である。ドイツの反ナチズム運動家ゲーヘンハウは「神の前に、神とともに、神なしで生きる」と語る。自分が正義であるという主張をしないということが重要であろう。これをEUから発信する必要がある。(山形)

三つの宗教が隔たっているのは悪いことではなく、3つの宗教を一つにする必要性はない。日本社会の基盤となる、「和をもって尊し」という価値観は、すべての社会には受け入れられない。ユダヤ人のジョークに、無人島に行った男が最初

にやったことは、2つのシナゴグを作ったこと、「自分が必ず行くシナゴグ」と「自分が絶対行かないシナゴグ」である。すなわち、常に対立する何かを想定することが必要である。神のための議論であれば、神は受け入れてくれるので、隔たりや違いは当然であり、複数の考え方やありうるという思想が大切である。なぜ、どうしてという根拠を示せるかということが重要である。ある文化において日常的に対立の論争がおこなわれている場合、対立の解決方法を社会が持たなければならない。意見が違うことがよくないのではなく、どのように解決していくかが問題で、社会の知恵すなわち寛容な社会で、一神教はそういう側面があって広がった。キリスト教自体も多様な社会を構成する許容性の大きな宗教で過激になったときに停める装置があればよい。(市川)

質問：イエスはユダヤ教に対して、ユダヤ教の信仰のあり方に問題を提起したのか。

回答：イエスは新宗教を作るより、ユダヤ教の改革を推進した。中世キリスト教に受け入れられるときに変容した。国教化されることによってイエスの言葉は埋没し、キリスト教の破綻が生じた。ユダヤ教では、旧約聖書の中に、異教バールの信奉者を壊滅させる場面がある。当初のユダヤ教は、政治的なヤハウエの宗教で、家には旧来のバールすなわちカナーンの神への崇拜を有すると言う二重構造であった。次第にバール神の淘汰が推進され、どんな宗教をも許さない実戦的構造を引き起こした。両者の諍いは、ユダヤ教の中にキリスト教が留まっているという意識があれば、起らなかったことではないだろうか。(山形)

最後に、市川氏から、スライドを用いて、ユダヤ教のヴィジュアルな解説がなされた。

(深見奈緒子)

第3回中東学会世界大会(WOCMES-3)参加報告



事業報告

世界大の国際学術大会として 2002 年に始まった中東研究世界大会は、同年ドイツ共和国マインツ、2006 年ヨルダン・ハーシム王国アンマンに続いて、2010 年スペイン・バルセロナにおいて、第 3 回大会を開催するに至り、順調にその活動を拡大してきている。今回は、バルセロナ自治大学を会場に、参加者数 2,700

名、パネル数 500 というきわめて充実した国際会議となった。

日本中東学会は、国際交流基金知的交流会議助成プログラムの援助を受け、NIHU プログラム・イスラーム地域研究および「世界を対象としたニーズ型対応地域研究推進事業：アジアのなかの中東」と連携して、「2つの海の出会うところー多元的な中東理解を求めて」を総合タイトルに、4 パネル・21 名を派遣した。この世界大会に第 1 回から連続して参加している日本は、今大会においても大きなプレゼンスを示すことができた。日本中東学会が派遣した 4 つのパネルを中心に、全部で 10 個のパネルが日本人研究者によって組まれた。日本人発表者総数は 51 名で、参加 72 カ国中第 10 位と、トップ 10 入りを果たした。ほかの上位国がすべて欧米か中東であることを考えれば、世界の中東研究において日本の果たすべき役割は大きいと確信した。
(東長靖)

パネル報告

第 1 パネル「統一性と多様性の中の西方イスラーム世界」(オーガナイザー：私市正年、佐藤健太郎)

この部会では、マグリブ・アンダルスが歴史的(8世紀～15世紀ころまで)に共通のイスラーム世界として認識されていたのか、あるいはどのような共有性を見出すことができるのか、という大きな枠組みを設定し、その上でムスリム・キリスト教徒・ユダヤ教徒間の互いの他者認識、祭りに見られる共存の実態、交流の歴史などが具体的史料に基づき報告され、議論された。スペインはいうまでもなくアンダルス世界の中心地であり、この問題は非常に関心の強い(ある意味ではデリケートな)テーマであり、会場はほぼ満員であった。従って、報告に対する反応は予想以上に強く、質疑も活発で日本の学界で同種のテーマのセッションを開催したときとは全く異なる熱気が感じられた。その意味では本セッションを設けたことは大成功であった。本セッションを通じて、イスラーム世界とも西欧世界とも等距離に立てる日本が橋渡し役を担いつつ、異なる宗教・文明の交流の歴史を検証する重要性があらためて再認識された。このような枠組みでの学術交流は今後も継続・発展させるべきであろう。
(私市正年)

第 2 パネル「世論調査結果からみたアラブ人のアイデンティティ」(オーガナイザー：加藤博)

この部会は、4本の報告から構成された。最初の3本はエジプト人の意識調査の結果報告であり、最後の1本はパレスチナ人の意識調査の結果報告であった。

第一の報告は、「エジプトにおける政治社会意識と地域差」と題された伊能武次報告であり、その内容は、以下のごとくであった。

近年のエジプトは 1990 年代初頭から着手した経済改革が功を奏してマクロ経

済面では成長を続けているが、同時に国民の間には社会経済的な不満が拡大しつつあり、政府はその対応に苦慮している。特に注目されるのは、そうした不満がエジプト各地において表出して、社会不安を増大させていることである。

2008年におけるエジプトの8県での国民意識調査は、この事実を確かめるために実施された。分析の対象となったのは、回答者の主観的な階級、生活満足度、不平等意識、社会的安定意識、理想的な上司観、政治的選好度、政治的関心、政治参加に関する質問に対する回答であり、それをクロス集計することによって分析した。その結果は、不満への意識の程度には、地域間、とりわけ下エジプトと上エジプトとの間に、大きな意識差があるということであった。

第二の報告は、「エジプトにおける社会意識の地域差」と題された岩崎えり奈報告であり、その内容は、以下のごとくであった。

エジプト社会は、所得分布や貧困率、就業構造などにみるかぎり、下エジプトと上エジプトで大きな地域差がある。とすれば、社会意識の有り様も、この両地方間で異なるのだろうか。階層や市民社会、ジェンダーなどの多くの社会学的研究は、社会に共有される意識としての社会意識が個人の社会経済的背景によって異なることを論じている。

したがって、エジプトについて、そのように仮定することは十分に可能であろう。実際、以上の問題関心にもとづき、2008年にエジプトで実施された意識調査において、第一の伊能報告も指摘した、社会意識の地域差が検証された。つまり、社会意識の大きな差がカイロ・下エジプトと上エジプトの間であることが明らかになった。

第三は、「エジプトにおける政治意識とアイデンティティ」と題された富田広士報告であり、その内容は、以下のごとくであった。

2008年にエジプト全国規模で政治社会意識を探った調査結果から、次の2点を指摘できる。第一は、アラブ主義、エジプト・ナショナリズム、イスラム主義への共感度は県によって当然強弱が現れるが、共感する政治イデオロギー・宗教信条を一つでなく三つまで挙げられる条件のもとでエジプト人には、これら三つの政治イデオロギーの重要性を三つとも認める選択傾向が見られるということである。第二は、先の2007年に大カイロ地域で行った政治意識調査からは、従来都市民共通の意識として指摘される政治関心、意識の高さ、政治有効性感覚の低さ、現実政治への参加意欲の低さが確認されたが、2008年全国調査では貧困問題が深刻といわれる上エジプト、ベニ・スウェイフ県、ソハーグ県において下エジプト4県よりも高い政治関心、意識、選挙での投票率などが確認されたということである。

最後の第四は、「パレスチナ人の政治的認知地図」と題された浜中新吾報告であり、その内容は、以下のごとくであった。

報告者の属する調査研究グループは中東地域の国際関係認識の類型を描き出す手法を考案した。政治的認知地図と呼ぶこの手法は、中東諸国の政府および域外諸国が中東の政治的安定に対する貢献の程度を問う世論調査データを必要とする。現地調査機関との協力により、われわれのグループは2009年5月に西岸地区、ガザ地区および占領下エルサレム地区での世論調査を実施した。

本研究はパレスチナ人が「中東地域システム」のイメージをどのように形成しているのかの大まかなアウトラインを描く試みである。この研究において彼らが認識するパレスチナとアラブ諸国、およびイスラエル・トルコ・イラン、そして域外大国の相対的位置関係を可視化するにあたって、アイデンティティとしてのウルーバ（アラブ性）と米国外交政策との距離感覚が構成要素になることが明らかにされた。（加藤博）

第3パネル「政府と大衆に対面するスーフィーと聖者」（オーガナイザー：赤堀雅幸）

14年目を迎えた「スーフィズム・聖者信仰研究会」は、マインツでの第1回、アンマンでの第2回に続き、第3回大会でも2ユニットからなる発表を組織した。

今回はとくに、近現代に時代を限定し、スーフィーや聖者が、近代国家やそのなかで形成された新たな民衆である「大衆」とどのように向かい合おうとしているかを、異なる地域について歴史学、宗教学、人類学の立場から検討する6本の発表を用意し、赤堀（上智大学）が司会を務め、思想研究を専門とする2名の専門家、東長靖氏（京都大学）とサナア・マクルーフ氏（カイロ・アメリカ大学）によるコメントを踏まえて議論を深めた。主題設定は、近現代イスラームと公共圏をめぐる議論を折り合わせていく可能性の探求を意識しており、前半のユニットには主として国家や政府との関係を論じる3本の発表、後半のユニットには大衆との関係を検討する3本の発表を配した。

具体的には、高橋圭氏（人間文化研究機構／上智大学）は19世紀エジプトにおけるタリーカ改革を主導したムハンマド・タウフィーク・バクリーの思想を分析し、丸山大介氏（京都大学）は現代スーダンにおけるタリーカと国家との関係、とくに国家主導で創設されたスーフィーの組織を取り上げて論じ、マル・トゥタン氏（CETOBAC, EHESS-CNRS）はウズベキスタンの国民的詩人であるアリー・シール・ナワーイーが、スーフィズムとの関わりについて、ソビエト政権下においてどのように扱われたかを、“*patrimonialisation*”（父祖性付与とでも訳すべきか）という概念を用いて説明した。新井和広氏（慶應義塾大学）は現在、インドネシアの宗教誌として広範に読者を獲得している『アルキッサ』が、ハドラマウト出身のサイドを素材に取り上げることに多角的な分析を加え、口承伝統の代替としての機能をそこにみる結論を導いた。高尾賢一郎氏（同志社大学）は、

現代シリアのアミン・クフタールーの多彩な活動を取り上げ、元来はカトリックにおける現代化を意味する *aggiornamento* の概念を援用して、スーフィズムの現代的なありようを示した。三沢伸生氏（東洋大学）は、日本人改宗ムスリムである田中逸平の生涯を軸に、近代日本における宗教状況とそのなかでイスラームが受容される過程を、とくに神道との関わりに注目しながら論じた。氏の発表は直接にスーフィーや聖者信仰に関するものではないが、本大会において日本におけるイスラームの受容状況を外国人研究者に知らしめることの意義を考慮してこれを最後に置き、結果的にはイスラームにおける信仰の複合性を、広い視野から問題とする効果的な締めくくりとすることができた。

今回大会は全般に聴衆の数が少ない印象があったが、第1回、第2回大会の発表の場ですでに交流を結んだ研究者を含め、比較的多数の聴衆を得ることができ、活発な議論を招くことができた。前回に引き続き、同様の主題で研究を推進してきた CNRS からの参加者であるトゥタン氏を含め、比較的若手の研究者による発表を盛り込んだことで、世代に関しても幅の広い共同研究を実現していることが示せたのも収穫であった。

本パネル以外に大会では、スーフィズム関係では3パネル、聖者信仰関係では1パネルが生まれ、関連するパネルも複数あって、私たちのパネルの参加者はそれらにも積極的に参加して議論に加わったが、かなり異なる視点からの取り組みも多く、それらパネルの参加者を巻き込んでさらに協力を拡大していくという点では、今ひとつ確たるものをつかめなかったのはやや残念に思われた。

本パネルの発表内容については、これをさらに充実した論文として書き改め、年度内に *Orient* 46号誌上に特集企画として発表する予定である。（赤堀雅幸）

第4パネル「〈オリエント〉は他の〈オリエント〉といかにして出会うか～日本における現代中東文学の受容について」（オーガナイザー：岡真理）

日本における現代中東文学研究の発展を目指し、2年前に現代中東文学研究会が発足した。本パネルでは、同研究会の新進気鋭の若手研究者4名が、各々の専門領域の文学が日本でどのように受容されてきたか（あるいはされてこなかったか）、その受容において、グローバルかつローカルな、どのような社会的、文化的、経済的等々の要因が作用しているかに関して報告した。

まず平寛多朗氏が「日本における現代アラブ文学の受容～新たなる社会建設のための思想的ツールとしての現代アラブ文学～」と題し、1960年代から80年代前半にかけて、日本における現代アラブ文学の紹介を牽引した、日本アジア・アフリカ作家会議の活動を紹介した。アジア侵略を生み出した近代日本に対する反省を共有する作家たちが、AA作家会議を通してアジア・アフリカの文学作品と出会い、そこに戦後日本が新社会を建設していく上で学ぶべき思想を発見するこ

とで、これら文学作品の翻訳・紹介を積極的に担い、それが「現代アラブ小説全集」全10巻に結実したこと、しかし、同会議の衰退に伴い80年代以降、日本社会におけるアラブ文学の紹介は、欧米でベストセラーを記録した特定作家の作品が主流となり、思想ベースの受容から商業ベースの受容へとシフトしていることが指摘された。

次に鶴戸聡氏が「日本における北アフリカ文学」と題し、フランス語圏アラブ・ベルベル作家の文学の受容の歴史を概説した。第二次世界大戦直後のカミュやサルトルの受容に始まり、やがてフランスに留学した日本人留学生らがアルジェリア戦争を「発見」することで、「抵抗文学」としてアルジェリア文学が紹介され、在日の問題や沖縄の問題に思想的に接続されてゆく。アルジェリア独立以後は、1960年代、70年代の世界的な第三世界主義の高揚のなかで「第三世界文学」として受容され、在日の作家がそれに日本語で応答するというインタラクションを生み出し、90年代以降は、ポストコロニアル、クレオール等の文学潮流が流行するなかで「マグレブ文学」として受容されるようになるという半世紀の受容史が詳細に論じられた。

続いて中村菜穂氏が「日本における現代ペルシャ文学の紹介」と題し報告した。アラブ文学に比してペルシャ文学/イラン文学はほとんど紹介されていないなかで、オマル・ハイヤームの「ルバイヤート」に関しては何種類もの翻訳作品があること、さらに、現代イラン文学についても、サーデク・ヘダーヤトに専一化した形で紹介がなされていることが指摘され、これら特定の作家、作品への「偏愛」を生み出す文化的感性について考察がなされた。

最後に細田和江氏が「〈ユダヤ文学〉から〈イスラエル文学〉へ」と題し、日本におけるイスラエル文学の受容について報告した。イスラエルのユダヤ人作家の作品であれ、日本では「ユダヤ文学」として理解され、「イスラエル文学」の社会的認知度が低いこと、イスラエル文学を代表する作家たちの主だった作品もほとんど紹介されていないなかで例外的に「ホロコースト文学」と「児童文学」という二つのジャンルの作品は積極的に翻訳されていること、またデヴィッド・グロスマンが日本では「パレスチナ/イスラエル紛争」に対する政治的関心から小説家ではなくジャーナリストとして受容されていることなど、日本社会における当該文学への関心のありようを反映して、その受容にどのようなバイアスがかかっているかについて報告がなされた。

いずれの報告も、単なる翻訳作品の紹介にとどまらず、異文化で生産される文学作品の受容に関してどのような複数の力学が作用するのかについて分析・考察した興味深いものであり、それだけに、同じ時間に関連テーマのパネルがぶつかったこともあり、海外の聴衆が少なかったことが惜しまれるが、本パネルの報告を聞かれたイタリアのアラブ文学研究者の方を通して、細田氏が来年3月、

ヴェネチアで開催される「デヴィッド・グロスマン」会議に招待され、同会議で日本におけるグロスマンの受容について報告することになったのは、本パネルの意義が評価された結果であり、大きな成果であると言える。（岡真理）

参加記

特別寄稿

《 Meeting Place of Multi-dimensional Researching : About some of the Japanese panels organized for the WOCMES-3 in Barcelona 》

After a first World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES-1) held at Mainz in September 2002 and a second one (WOCMES-2) organized in Amman in June 2006, the third session (WOCMES-3) took place in Barcelona in July 2010. Due to the success of the first two sessions, about four hundred and sixty panels have been scheduled this year, and it is worth noticing that over thirty activities happened simultaneously. Practically speaking, each panel lasted two hours including twenty minutes for the presentation of each paper, followed by ten minutes of discussion.

The Japan Association for Middle East Studies (JAMES) organized five panels around the following topics: “Meeting Place of Two Oceans (Majma‘ al-Bahrayn): Multi-dimensional Understanding of Middle East”. I had the honour to participate in one of them entitled “Sufis and Saints Facing the Government and the Public” divided into two sessions. The other Japanese panels were focused on multiple identities of the Arab people based on the results of the recent poll survey and the reception of Modern Middle Eastern literature in Japan.

The panel “Sufis and Saints Facing the Government and the Public” planned by Kei Takahashi (Sophia University) and Takao Kenichiro (Doshisha University) and advised by Masayuki Akahori (Sophia University) and Yasushi Tonaga (Kyoto University) developed especially the forms and implications of Sufism and saint veneration in public sphere within modern Muslim societies. The objective was to discuss the situation surrounding Sufism and saint veneration in modern contexts by focusing on their public expressions, supported by the illustration of different case studies. Each of the papers had to deal with the question of contemporary Sufism’s public expression as a significant factor shedding light on the “modernity” of Sufism.

The panel proceeded in one session with two panels time duration. The diversity of issues raised by the presenters such as tariqa reform, political

influence and official exploitation of Sufism, its revaluation in the context of Islamic orthodoxy, the role of Media, and the link with other religious practices, as well as the importance of the area covered – going from the Middle-East (Egypt, Sudan and Syria), to the Far East (Japan), through Southeast Asia (Indonesia), and Central Asia (Uzbekistan) - helped to shape a global vision of Sufism's modernity and its relationship with public sphere.

The discussants, Yashushi Tonaga (Kyoto University) and Sanaa Makhoulf (American University of Cairo), contributed to tie the different presentations together to highlight different trends of “modern” Sufism by replacing the different cases in the evolution of a three-axis Framework of Sufism –the three axes consisting in Popular Cult, Mysticism and Ethics [See “Sufism in the Past and Present. Based on the Three-axis Framework of Sufism”, TONAGA Yasushi, *AJAMES*, n°21-2, 2006, pp. 7-21], and bringing some of them together regarding the post-colonial configurations of the States and the role Sufism had to play in the agenda of nation-building.

Although their purposes were to show the current situation of Sufism and Saints studies in Japan, the panels were also created to promote academic partnership, which is why they were organized in cooperation with Egyptian, Japanese and French researchers. Since the first WOCMES in Germany, Japan has always invited French researchers to join its panels. Thus, after the participation of French academics like Denis Gril (Provence University) in 2002, Alexandre Papas (CNRS) and Thierry Zarcone (CNRS) in 2006, I had the chance to meet and work with Japanese and Egyptian experts in this third session. And maybe, in my opinion, there is no better way to illustrate and also justify the topic of this panel: confronting a “Multi-dimensional” issue with a plurality of visions (in this particular case, those of Japanese, Egyptian and French observers) was certainly the most suitable way to produce a fruitful base for further investigations.

We may hope that such initiative might work as an example to strengthen the international cooperation among scholars coming from different traditions of research, especially for this kind of issues that remains trans-national in essence such as Sufism.

Marc Toutant (CETOBAC/Paris)

《大会参加記》

この度の中東研究世界大会が開催されたスペインのバルセロナ自治大学は、市

街地のバルセロナ大学とは別の組織であり、中心街から列車で30分ほど北上した郊外に位置している。山間のキャンパスは広大で、筆者の宿泊していた学生寮からは会場の文学部まで徒歩で20分ほどもかかった。イベリアの猛烈な太陽に曝されつつ汗だくで学内を迷い歩く参加者も多く見られたが、食堂や雑貨店、銀行等も備えられていて、腰を据えて学会に参加するには便利であった。

学会自体は極めて大規模なもので、発表内容もあらゆる分野に及んだ。参加者はヨーロッパと中東・北アフリカからが主であり、存外に北米の研究者は少なかったように思える。日本からは数十名の参加があったものの、韓国や中国など他の東アジア諸国からの参加が見られなかったのは残念だった。

言語は英語とフランス語で、大半はパネルごとにどちらかの言語を選択していたが、ときおり同一パネルで二言語の発表が混在することもあった。場所がロマンス語圏のスペインだということもあってか予想以上にフランス語の発表が多かったが、フランス人よりも、スペインやイタリア、レバノン、マグレブあるいはギリシアからの参加者がむしろ積極的にフランス語を使用していたようだ。さまざまなお国訛りのフランス語を聴きながら、地中海世界におけるフランス語の有効性について改めて認識させられた経験だった。

発表の内容はといえば、大きなテーマの国際会議の常で、必ずしも専門を同じくしない聴衆にむかって20分程度で何かを語ることは難しく、論点を絞り込むか、入門的・概説的な議論に徹するかに分かれたようだ。筆者の専門とする現代文学・演劇研究の分野では——なぜかイタリア人の研究者が多かった——イタリアにおけるアラブ演劇研究を紹介するパネルや、レバノンの現代フランス語小説の主要テーマを論じる発表、70年代アルジェリアのアラビア語文学の概説など、比較的大まかな議論が多かったものの、特定の小説や作家を論じる研究も少数ながら聴講することができた。また、カタルーニャ地方での開催ということもあり、同地のアリカンテ大学によるパネルは、地中海地域における多文化共生の視点から、カタルーニャ女性による古いモロッコ旅行記やマグレブ文学のスペイン語・カタルーニャ語への翻訳の問題等を論じていた。

なお、日本人研究者の多くがフルペーパーを配付資料として準備していたのは非常に好評だった。諸外国の発表者で配布物を準備している者はほぼ皆無で、パワーポイントの使用も余り多くなかった。プログラム上、似通ったジャンルのパネルが同時に開催されて片方の発表しか聴講できない例も多いため、「参加はできなかったが興味がある」という人々に渡せる資料があれば便利であろう。実際、発表数が余りに多く、また日程の一部しか滞在しない発表者も多いため、「ほとんど他の発表を聴くことができなかった」という声をしばしば耳にした。

国際学会は外国の研究者との交流の場という性格が強いが、とりわけマイナー分野の研究者にとってその意義は大きい。筆者も、今回の学会で知り合った同業

者たちとすでに意見や論文の交換を行っている。だいたい言うことはみな同じである——「周りに同じようなことをやっている人間がいないんです」。

(鶴戸聡)

《WOCMES2010 年バルセロナ大会に参加して》

私にとって今回のバルセロナ行は、西欧諸国の中でこれまで訪れたことがなかったスペインを訪れる機会を与えてくださるものであった。現時点から振り返って、大会参加を通して大きく言って次の三つの貴重な収穫を得ることができた。

一番大きな経験は、日本の中東研究の国際的活動に学会員として参加したことである。私にとって WOCMES に参加するのは、個人、学会いずれの資格においても初めてのことである。一橋大学において加藤博会員が推進するニーズ対応型地域研究推進事業「アジアの中の中東」では、過去 5 年中東各国でいくつかの問題意識に基づいてアンケート・世論・意識調査を実施し、その結果を還元している。その一つシリア、パレスチナ、エジプトでの世論調査結果に基づき、「アラブ人の多様なアイデンティティ」を探るプロジェクトに、私は 2008 年以来参加させていただいている。

猛暑の中バルセロナ自治大学において一週間にわたり部会は繰り広げられたが、我々 5 人の発表は初日の夕方 5 時から 2 時間たっぷり使って行われた。聴衆は教室から溢れる程と言うわけではなかったが、エジプト、チュニジア、モロッコ、イギリスなどの著名な研究者が聞きに来てくれた。2008 年にエジプト全国規模で政治社会意識を探った調査結果から、私は次の 2 点を主張した。(1) アラブ主義、エジプト・ナショナリズム、イスラム主義への共感度は 6 調査県によって当然強弱が現れるが、共感する政治イデオロギー・宗教信条を一つでなく三つまで挙げられる条件のもとでエジプト人には、これら三つの政治イデオロギーの重要性を三つとも認める選択傾向が見られる、(2) 2007 年に私が大カイロ地域で行った政治意識調査からは、従来都市市民共通の意識として指摘される政治関心、意識の高さ、政治有効性感覚の低さ、現実政治への参加意欲の低さが確認された。しかし 2008 年全国調査では貧困問題が深刻といわれる上エジプト、ベニ・スウェイフ県、ソハーグ県において下エジプト 4 県よりも高い政治関心、意識、選挙での投票率などが確認された。

発表後の質問は私市正年会員から「イスラム主義」など質問項目の意味、有意性に関して、またエジプト人院生からはこうした世論調査手法を駆使した政治社会意識研究が我々のような国外の研究者によってなされていて、可能な限り研究交流を深めたいなどである。

二番目に私が感じたのは、この学会の規模と性格についてである。これまで参加経験のある Middle East Studies Association in North America や British

Society for Middle East Studies と比較して、WOCMES は非欧米地域からの参加者、発表者がかなり多いように見えた。日本からは教員、院生合わせて総勢 30 人位は参加していた。会場では旧知のエジプト人、レバノン人、イギリス人研究者にばったり出会って旧交を温めたりした。部会によってペーパーの用意、聴衆の多寡に違いが見られるのは致し方ないことなのかもしれない。また日本からもそうであるが院生が多数日頃の成果を発表していた。これからもこの学会が研究発表のレベルを維持しつつ院生の国際的トレーニングの場を提供してくれることを願っている。

三番目にバルセロナという不思議な都市の魅力について触れておきたい。ピカソ、ガウディなど現代西欧の芸術家を育んだことで知られるが、少し郊外に足を伸ばすと Girona のようにカタルーニャ地方に中世以降広がったユダヤ人の居住区や生活空間に想いを馳せることができる。イスラム化の名残また然り。

このような機会を作ってくださった日本中東学会および国際交流基金に厚く感謝申し上げる次第である。

(富田広士)

AFMA 参加報告

アジア中東学会連合 (AFMA) の第 8 回大会が 9 月 25-26 日に北京で開催された。アジア中東学会連盟の大会は、2 年ごとに AFMA に加盟する中国、韓国、日本、モンゴルの 4 つの学会の持ち回りで開催することになっている。今回の大会は、中国中東学会と中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所の共催で、ノヴォテル・ピース・ホテル (北京諾富特和平賓館) を会場として開催された。

今大会の共通テーマは「中東の安全保障と東アジアの役割」で、4 つのセッションが設けられた。開会式では、楊光中国中東学会会長 (西アジア・アフリカ研究所所長)、長澤栄治日本中東学会会長、Song Kyung Keun 韓国中東学会会長、Sukhrachaa Nyamzagd モンゴル中東学会会長がそれぞれスピーチを行った。第一セッション「中東と東アジアの歴史的・文化的つながり」(8 名)、第二セッション「中東における安全保障」(10 名)、第三および第四セッション「中東における東アジア諸国の役割」(10 名ずつ) では、計 48 名が研究発表を行った。発表者が多数にのぼったため、発表時間は 8 分ずつで、質疑は各セッションの最後にまとめて行われた。第 5 セッションで総括として、4 学会からそれぞれ 1 名ずつが総括コメントを述べた。

日本中東学会では、若手研究者の国際学会での研究発表を奨励する目的で発表者を募った。役重善洋、平松亜衣子、栃堀木綿子、中村覚、清水学、山岸智子、酒井啓子、三浦徹が研究発表を行ったほか、長澤栄治、東長靖、黒木英充の各理

事が参加した。韓国中東学会から 5 名、モンゴル中東学会から 3 名の研究発表があった。今回の大会では、中国語と英語の同時通訳が行われ、中国側の発表および質問のほとんど中国語で行われ、他の参加者は英語の通訳を介してこれを聞くことになった。前回第 4 回北京大会では英語ですべて行われたが、今回は中国側の発表者を広げるためにこのような方法をとったとのことであった。

全体的な印象を述べれば、まず中国側の発表者の数の多さである。中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所は、中東やアフリカ（サハラ以南を含む）を専門とする研究スタッフ約 50 名を擁し、さらに今回の大会では、上海や南京や内蒙古の大学から、あるいはジャーナリストや外交官や武官出身者の研究発表もあり、中国における中東問題の重要性が強まっていることを感じた。さらに上海外国語大学には、政府の要請により中央アジア研究所がつけられたという。しかし、これら中国の中東研究は国際的な舞台ではほとんど知られていない。7 月に行われた第三回 WOCMES では、中国と中東の関係をテーマとするパネルが設けられていたが中国からの参加者は会議全体としてもゼロであった。研究発表の多くは、安全保障やエネルギー資源問題であり、これについての関心の強さが示されている反面、イスラームという問題設定は今回の会議に関する限り表からは退いてみえた。他方、「中国は中東と近代以前からの交流があり、欧米諸国よりも中東に近い位置にある」という指摘が注目された。総括セッションで筆者は、東アジア諸国は、文化的に西洋からも中東からも影響を受けており、中東を広い視野から理解しうる位置にあり、そこに東アジアの中東研究のもつ重要性があると述べた。

今回の大会の開催にあたっては、外部からの助成金をうることができず、正味一日半の日程で開催することになった。このため、研究発表の割り当て時間が一人 8 分に切り詰められ、また懇親会もエクスカージョンもなく、参加者同士が個々人で話しあう機会が少なかったのが少々残念であった。折しも、尖閣列島近辺での中国漁船拿捕問題で日中関係が揺れるなかでの大会となったが、その影響はみじんも感じられなかった。本大会の準備と運営にあたった中国中東学会に改めて謝意を表したい。

(三浦徹)

参加記

《中国の対イラン政策—考慮されるべき人民元問題と対米関係のリンクージ》

北京で開かれた第 8 回 AFMA 大会に参加する機会が与えられ、最近の中国、中国の対中東政策の最近の動きについて、その一端に触れることができた。中韓日蒙から報告者があり、そのなかで日本側の報告者 10 名は概して積極的な役割を果たしたと思う。各国とも若い研究者が参加しており、世代替わりを感じさせ



るものがあつた。今回の大会について CAMES 側が短期間で準備をして大変だつたと思われるが、2つの点で印象が残つた。第1に、発表時間(一人8分)がほぼ厳格に守られた会議運営である。第2には、中国の同時通訳の方の能力の高さである。わたしはペーパーを事前に通訳の方に渡してなかつたので、報告直前にやや難しいと思われた専門的用語である Naked short selling(日本語では「裸の空売り」などと訳す)を説明に行った。ところが通訳の方は、その意味内容を正確に知つていたので、正直言って驚いた。

今回の統一テーマである「中東の安全保障と東アジアの役割」は中国側のイニシアチブのもとに決定されたと思われるが、中国の経済的政治的台頭を背景に一層現実性を持ってきたテーマであつた。もちろん、このテーマには必ずしも含まれない中東・東アジアの歴史的文化的つながりなど多様なテーマもとりあげられた。ここでは統一テーマの報告に関して筆者の強いバイアスが入るが、若干の感想を記してみたい。第1に、中国の対イラン外交、特に最近の国連安保理で核開発問題に関連して採択された対イラン経済制裁に関する中国側研究者の報告数(7本)が目立つたことである。これは中国が国連安保理で従来の政策を変更して反対、棄権から賛成に転じたことに対してその背景を説明しようとするものであつた。中国側報告者の間で微妙な評価の相違はあつたが、基本的にはイランは核兵器開発の疑惑を晴らす努力をすべきであるという判断のもとに中国の対イラン政策を変更あるいは微調整させようとしたという論理である。しかし他方ではイランの核エネルギーの平和的利用には賛成であり、また対イラン武力攻撃や国連安保理決議を超える個別制裁の強化には反対という立場を明確にしていた。中国が対イラン政策の変化に対する海外の評価を非常に気にしており制裁賛成は基本的立場の変化を示すものではないことを示そうとしているという印象を持った。触れられなかつた側面は米中関係と中国の対イラン政策との関係である。筆者は米国の人民元切り上げ圧力への対応と中国のイラン政策が微妙にリンクしていたと見てゐるが、北京で入手した中国の経済学者の本でもこの点が示唆されていた(郎威平説『新帝国主義在中国2』東方出版社、2010年5月,6p)。第2に自分の報告にひきつける形で手前味噌的であるが、現在の世界経済の不安定な状況とそのなかでの中東・東アジアの役割を論じる報告が皆無に近かつたことである。統一テーマを広義にとれば、人民元を一つの焦点とする現在の通貨戦争、ドル体制に関する湾岸諸国(GCC)の動向などが今後の国際通貨体制との関連で注目されており、湾岸諸国および中国の国家ファンドの規模の大きさ、対外投資余力、新たに発足

した G20（中国、サウジアラビアなども参加）の役割の可能性などを考慮に入れると、中国・湾岸の経済的影響力と世界経済との関連が今後一層重要になってくると見られる。中東研究に入る研究者の関心からは遠かったが、イスラーム金融なども含め、無視できないテーマとなりつつある。第 3 に、中国が伝統的な思想（たとえば儒教、道教など）を肯定的に捉える動きが報告の一部に見られたことである。空港で分厚い『漫画中国思想』（蔡志忠著）を購入したが、中国「社会主義」における伝統文化の復興という興味深い問題を提起しているように思われた。

最後に、AFMA が 2 年に 1 回の大会を継続することは意味があるが、今後は必要に応じテーマを絞った小グループでより頻繁に交流する枠組みも意義があるのかも知れないと考えている。

（清水 学）

《国策としての中国での中東研究の一側面》

今大会のテーマが「中東の安全保障とアジアの役割」であるという学会のメーリングリストからの連絡に気付き、近年の自分の研究テーマである中東の安全保障問題とまさに一致していたので、研究発表を申し込んだ。自分としては、AFMA での報告は、第一回大会(日本)、第五回大会(韓国)に続いて、三回目の報告となった。

私は中国に関してよくわからないので勉強できるよい機会だと思っていたが、9 月 7 日に中国漁船拿捕事件が発生し、大会の開催日が近づいても事件が解決される様子がないので、いささか気掛かりであった。ただし自分の知人が、中国の大学の構内では普通に授業がされており、日本ファンの中国人大学生がアニメサークルのチラシを配っているなどというその頃の様子を知らせてくれたので、気が楽になった。政府間の大きな出来事はともかく、一学会員として大会では、学術的な観点で議論するという学者としての振る舞いを保つこと、また、中国の先生とは友好関係を強めるために貢献できる交流することに専心しようと心懸けようと思いつつ、北京に乗り込んだ。

3 セッションにわたる会議全体でもっとも強く受けた印象は、中国の学会員たちが、現代研究に注力して取り組んでいる実態であった。これは、日本、韓国、モンゴルの中東学会とは、顕著に異なる特性であった。中国中東学会の内情を詳しく知っているわけではないが、中国学士院の先生たちは国策として中国中東学会会員となり、研究テーマとして現代研究を重点化しているそうである。長沢会長は、中国にとってイスラーム地域が国内・隣接地域の問題であることが背景ではないかと述べていた。また、中国の先生には、アラビストもなかなか多くの数があり、しかも、それらの先生には英語を話せない方も多いようで、結局、食事時間などに私はアラビア語で中国の先生と会話するという楽しい経験を何度かし

た。

各セッションでは、私としても討論を盛り上げたいと考え、また自分としても関心があったので、中国による中東政策に関して、重点的に質問したり、コメントしたりすることにした。第一セッションは「中東と東アジアの歴史的・文化的絆」であったが、Zhang Hongyi 教授による「現代アラブの目に映る中国」が興味深かった。アラブの新聞などにおける中国に関する報道を丁寧にフォローし、とりまとめた内容であったので、質疑時間では、アラブの目には中国の新しいプレゼンスにはどんな問題があるかと見えているか質問したところ、Hongyi 教授は、中国の低価格製品による地元産業の破壊や、孔子学校の設立に対する批判的見解などに関して丁寧にご回答下さった。また、Hongyi 教授に食事時間に伺うと、中国は、このような記事を取りまとめた結果に基づいて、対アラブ・パブリックポリシーを調整しているということであり、対アラブ重視政策のきめ細かさにとっても驚いた。

第二セッションでは、イラン、アフガン、パレスチナ情勢に関する報告が続いたが、どれも総じて、今後の見通しは困難であるという分析結果であった。そこで私は、特にパレスチナ問題に焦点を絞り、もしも政治的解決には何年もかかるという見通しが強いとするなら、その期間、パレスチナ民衆の苦痛を和らげることが重要であり、そのために中国はパレスチナ民衆には何を援助しているのか、と質問した。答えとしては、中国政府は、和平プロセスを促進するよう申し入れるために特使をこれまでに三人派遣したなどと述べていたが、これといった援助の内容はあげられなかった。自分としては、中国が中東で資源外交を繰り広げ、スーダンやアンゴラには多くの援助をしていると聞いていたが、パレスチナにはあまり援助をしていないのだな、と内心で思った。すると第三セッションの冒頭では、司会の中国の先生が、もともとタイトなプログラムを突然変更して、Wang 元大使による「中国によるパレスチナ政策」というスピーチを最初に繰り込む、と決定した。いささかびっくりしつつも聞いてみると、中国がパレスチナ独立国家樹立を支援している方針などに関して説明はしていたものの、対パ援助の内容は特になかった。そこで、この学会にかける中国側の広報的意図をある程度、確信した瞬間となった。アジア中東学会の中では、唯一、中国は民主主義国家ではない。中国中東学会会員たちの姿勢からは総じて研究者としての真摯な姿勢が感じられたが、進行の中ではときに広報的意図が感じられることがあった。それに対する私なりの対応として思いついたのは、学術的に正当な質問とコメントをすることだけであった。

私としては、多くの質問をセッション中にしたことをきっかけに、コーヒープレークや食事の時間には、特に中国の学会員と会話が大きい弾んで楽しい思い出となった。また、今後の交流を約束して帰国の途についた。本学会の様子に関し

ては、『中東協力センターニュース』に予定されている拙稿でも、学会活動の「宣伝がてら」、触れてみたいと考えている。

(中村覚)

《中東研究における「国境」を越える学術交流の魅力と困難》

今回、アジア中東学会連合会第8回大会に参加させていただき、触発された点、認識を新たにした点が多々あった。とりわけ、約40人の発表者の内、6割以上が中国人研究者であったこともあり、中国における中東認識の一端を知ることができたのは大きな知的刺激となった。

それは、当初私が抱いていたステレオタイプな中国認識を裏切るものでもあった。大会の開催時期が、ちょうど釣魚諸島問題で中国政府の対日姿勢が最も硬化している時期だったこともあり、さらには、70年代の中国のパレスチナ革命勢力への支援や日本国内における左翼運動における「中国派」のイメージも重なり、中国の歴史的な「反帝国主義」のスタンスが対中東認識にも多少は反映されていることを、漠然とながらも「期待」していたからだ。

しかし実際には、中国側の研究発表のなかで、イスラエル批判、アメリカ批判は非常に抑制されており、植民地主義の被害者としてのパレスチナ人・アラブ人という視点を明確にした発表は、私の英語聞き取り力と集中力の及ぶ限りでは、見出すことはできなかった。むしろ、アメリカの覇権と衝突しないかたちで、中国のソフト・パワーをいかに行使していくか、という問題意識にもとづく発表が非常に目立っていたように思う。そうしたなかで、新疆ウイグル自治区やチベット自治区を指して「ウェスタン・フロンティア」（元は中国語なので、英語とは若干ニュアンスが異なるかもしれないが）と表現し、そこでの開発や少数民族対策のノウハウを中東地域でいかに活かすかといった議論がなされるなど、少数民族の立場から聞いたらどう思うだろうかという議論も見受けられた。

私自身は、「近代日本におけるキリスト教シオニズムと植民地主義」という発表を行い、ひそかに、中国の研究者の抗日・反帝スピリッツの琴線にわずかでも触れることができるのでは、などと無邪気なことを考えたりもしていたものの、具体的な反応はゼロであった。しかし、こうした私の「期待」と中国側の反応とのずれは、結局のところ、私のプレゼン能力・コミュニケーション能力の貧弱さによるところも大きかったようにも思う。また、中国側の発表でも、よく耳と頭を澄まして聞いていれば、もっと別の印象を得ることができたかもしれないというようにも思う。

たとえば、私の順番の前に発表された（私は全体で二番目の発表だったので、一番最初の発表者）仲躋昆氏（北京大学外国語学院教授）は、「東洋文化振興のためのヨーロッパ・西洋中心主義に対する批判的見解」と題した話をされ、そのな

かで、ヨーロッパ文化の源泉であるキリスト教が生まれたのは、中東・アジアであるということ、欧米経由でないアジア諸国間の対話・交流が重要であることなどについて、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』にも言及しつつ、語られていた。私の関心の中心であるパレスチナ問題については突っ込んだ言及がなかったので、後で英語で話しかけてみたものの、中国語とアラビア語しかできないということで、意見交換をすることは叶わなかった。後で知った情報では、仲さんは中国におけるアラビストの重鎮（つまり 70 年代の PLO 支援などにも何らかのかたちで関わられていたかもしれない）とのことで、通訳を介してでも意見交換をする努力をすればよかったと今更ながら後悔している。

ある地域における歴史認識や民族意識についてしっかりと知ろうとするのであれば、そこで生きる人との交流こそが重要であり、その際、言語の壁を越える努力が決定的に必要とされるということを短い滞在ながら、改めて感じさせられた大会参加であった。

大会終了後、北京郊外の盧溝橋に行き、抗日戦争記念館を 10 年ぶりに訪れた。前回訪問時に気付かなかっただけなのか、あるいはリニューアルの際に変化したのかは定かではないが、抗日戦争の位置付けは、「世界反ファシスト闘争への勝利」とされ、その際のイギリスやソ連、アメリカとの軍事協力が展示のなかで強調されていた。そういえば、南京大学で南京虐殺とホロコーストについて比較討論するシンポジウムが行われたことを、以前、同大学の研究者から聞いたことを思い出したが、これも「反ファシスト闘争」という文脈を背景にしたものだとも考えられる。かつて、「反帝国主義」を掲げてパレスチナを支援していた時代からの中国の変化は、こうしたところにも現れているように思った。

天安門広場からさほど遠くない、王府井の欧米有名ブランド店が立ち並ぶ町並み——今回の大会の会場となったホテルもそのなかにあった——に象徴されるように、「反帝国主義」「反植民地主義」のスローガンから脱し、急速な資本主義化の道を邁進している中国が中東政策においてどのような舵取りをしようとしているのか、ますます目を離せないというように感じた。

いずれにせよ、領土問題で揺れる現在の日中関係を考えたとき、日本と中国、さらには他のアジア諸国との間でパレスチナ問題について、率直かつ突っ込んだ議論をするためには、まず、日本帝国主義によるアジア侵略についての歴史認識を共有した上でなければ、次に進むことがなかなか困難であるのは確かであるように思う。そして、そのためには、何よりも市民レベル・研究者レベルでの交流・対話が強く求められているように思う。

(役重善洋)

《アジア諸国における中東／イスラーム研究との出会い》

第 8 回アジア中東連合への参加は、自分にとって、海外で開かれる国際会議に

おける初めての発表の場となった。日本からは、日本中東学会の第一線で活躍されている先生方に混じって、若手研究者として筆者を含む院生三名が参加した。また、大会には中国・韓国・モンゴルからも多くの中東研究者が参集し、北京で開催された AFMA 第8回大会は、活気に溢れた会議として筆者の目に焼き付いた。

初めての国際会議での発表ということもあり、発表の前には期待と同時に不安感やプレッシャーが押し寄せてくることもあった。しかし、そのような場で発表を行い、参加者からコメントをいただき、英語での討論に悪戦苦闘するという経験は、筆者にとって大きな刺激となった。筆者は会場のなかで、アジア各国を代表する多くの中東研究者が多数出席する国際会議に参加し、また自ら発表する機会を得た喜びをひしひしと感じた。

自分は、これまでに幾度か国内外で開かれる中東／イスラームに関する会議やワークショップ等に参加してきた。そのなかでも、今回の会議は筆者にとって特別な経験を得た大会であった。アジア中東連合における発表は、近代科学研究においてつねに中心的な役割を果たしてきた欧米の研究者による中東研究でもなく、また中東出身者自身による中東研究でもない、いわば「第三者」の立場にある国々における中東研究の成果である。このことは、筆者が日本以外の東アジア諸国における中東研究の動向に関心を持つ絶好の機会となった。

自分が特に興味を惹かれたのは、日本、中国、韓国、モンゴルというそれぞれの国における中東研究の特色がいかなるものであるのかといった点である。今回の大会のタイトルが“The Middle East Security and East Asia’s Role”であったことから、中国から参加した研究者による発表は、国際関係、とくにパレスチナ問題とイランの核問題に関する話題が多かったのが印象的であった。中国は国連安全保障理事会で拒否権を持つ国である。そういった背景もあってか、これらの国際政治問題に関する活発な議論が展開された。

また、自身がイスラーム復興に関する研究を行っていることから、参加各国のイスラーム研究の動向がいかなるものであるのかという点に関しても非常に強い興味を抱いた。まず、アジア中東連合の構成各国の政治的・社会的文脈におけるイスラームの捉え方は様々である。中国では、西部を中心に多くのムスリムが居住している一方で、同国の政治の中核は唯物論を基盤とする共産主義政権である。また、韓国はイスラームと同じ一神論の系譜を持つキリスト教の信徒を数多く擁する国である。さらに、モンゴルの南東部には中国領土内に位置する内モンゴルが広がり、多数のムスリムが居住している。これらの国々における中東研究のなかで、イスラーム研究はどのような比重を占めているのであろうか。また、各国のイスラーム研究には独自の歴史的展開や特徴的な視点が存在するのであろうか。

本大会は、国際会議で発表を行うというという経験のみならず、日本以外のア

アジア諸国における中東研究のあり方に興味を持つきっかけを与えてくれた。本大会のように、日本と他のアジア諸国の中東研究が交流を持ち相互に刺激を与え合う機会がこれからも増えていくことを心より願っている。

(平松亜衣子)

《東アジアにおける中東研究の現状と展望》

2010年度のアジア中東学会は9月25、26日に中国北京にて行われた。渡航直前に急浮上した尖閣諸島での事故による日中関係の冷え込みの問題から、不安と焦りを感じた。しかし先生方の冷静な対応に励まされ、政治的問題と学問の別が認識上重要であることを強く感じた。前日入りした北京では、空港に出迎えの方が来られ、先方の配慮は大変ありがたいものであった。

滞在先のノヴォテル・ピース・ホテルと同じ建物を会場として行われた学会では、『中東の安全と東アジアの役割』という副題のもと総勢約40名が発表を行った。各人の持ち時間8分、進行はほぼ時間通りにスムーズに行われ、中国語の発表には英語、中国語以外の話者の際には中国語の同時通訳が行われた。発表は約10名の発表者による4つのセッションから構成され、全員の発表が終わった後に質疑応答・コメントの時間が設けられ、活発な意見交換が行われた。自身の発表に対して、中国人研究者の方がヨーロッパのムスリム移民に対する政策の観点への関心から、質問をしてくださった。この点に関してこれからさらに検討してみる必要がある。

研究会全体を通じて目立っていたと個人的に感じたのは、中国のイランへの核問題の関心の強さである。さらに中国は国連の安全保障理事会の常任理事国であることからイランの問題が国際的な脅威として強調された。しかし、イランの核開発疑惑に対しての経緯については参加者が共通に認識できていたのだろうか。他方で中国がイランに対して武力行使ではなく、交渉を重ねて問題解決を図ろうとする協調型の姿勢をとろうとしていることも報告された。これには、2001年同時多発テロ事件以降のイラク戦争に対する反省と、中国の発展に欠かせない石油の重要な供給地であるイランとの協力関係維持の狙いがある。本研究会では、元在中東大使も発表を行っていたように政治的なテーマに重点を置いた議論が展開され、中国の学会における実際の対中東政策との関係の緊密さがうかがわれた。その一方で国内のムスリムの問題等、より中国の独自の問題に関する研究発表は行われなかった。

アジア諸国における中東研究の動向の一端として、とりわけ一研究機関に40名以上もの中東研究者が在籍している中国中東学会の規模の大きさに圧倒された。今回、中国の研究者による発表は政治的な内容以外のものは少ないように感じたが、実際にははるかに多様なディシプリンの研究が展開され、数年後には研究の

傾向も違ってくるのかもしれない。北京中心街の王府井では、オリンピック開催に伴い街が再開発され、日本より 10 度近く低い気温の中でもにぎわう人々の熱気を感じ、また多くの外国人もひしめくなか、メディアで取り上げられたような日本人への反感は特に感じられなかった。発表の機会をいただいたこと、中国中東学会の受け入れに感謝申し上げたい。

(枋堀木綿子)

第 19 回韓国中東学会国際会議に参加して

去る 10 月 16 日（土）に第 19 回韓国中東学会国際会議が韓国外語大（Hankuk University of Foreign Studies）にて開催され、日本中東学会からは会長と事務局長が招待を受け、長沢と事務局長の代理として理事の青山弘之会員が参加した。韓国国際戦略研究所との共催で開催された昨年ほどの大規模な会議ではなかったが、韓国らしいテーマ選択と手際よい会議運営および報告の内容から学ぶところが大きかった。韓国国際交流財団の支援により、今回は日本と中国から 2 名ずつ、エジプト・アラブ首長国・イスラエルから各 1 名の計 7 名の研究者が外国から招待を受けた。また、韓国の大学で教鞭を取るイラン人・エジプト人研究者 3 名の参加もあった。第一セッション「エネルギーと経済」（7 報告）、第二セッション「政治と文化」（6 報告）、第三セッション「歴史と言語」（6 報告）の 3 つのセッションが組織され、第 2 と第 3 は並行セッションであった。第一セッションは、今回の国際会議のテーマである「中東和平と韓国と中東の間の核エネルギー・パートナーシップ」が取り上げられ、計 400 億ドルとも言われるアラブ首長国への原発受注に関する報告などがあった。第 3 セッションは、アラビア語で行なわれたが、第 2 セッションと同時間であったために残念ながら参加できなかった。第 2 セッションで発表した青山会員によるアラブ諸国の東アジアの各国のイメージの比較調査の報告（浜中新吾会員との共同調査）は調査手法など多くの質問がなされ、同セッション中でもっとも関心を集め存在感があった。開会式の日本中東学会を代表しての長沢のあいさつでは、一ヶ月前の AFMA で東アジア各国が中東研究に関して相互に学びあう重要性がますます高まっていること、また今回の会議のテーマと関係して潘基文国連事務総長の長崎・広島訪問と韓国人被爆者問題などに触れた。予稿集も印刷配布されており、関心ある会員にはその内容をお知らせすることもできるので、その場合は長沢までご連絡いただきたい。

(長沢栄治)

『日本中東学会年報 AJAMES』編集委員会報告

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会よりご報告いたします。

1. 26-1 号刊行のお知らせ

すでにお手元に届いていることと思いますが、26-1 号が 7 月に刊行されました。論文 4 作、特集（総論および論文 3 作）、研究ノート 1 作、書評 3 作、博士論文要旨 2 作が掲載されています。会員の方で冊子がお手元に届いていない方がおられましたら、事務局にご一報ください。

2. 26-2 号編集中

現在、26-2 号の編集作業を鋭意進めております。2011 年 1 月の刊行予定です。

3. 27-1 号投稿締切のお知らせ

27-1 号（2011 年 7 月刊行予定）への投稿締切は 12 月 20 日です。論文、研究ノート、書評など、各ジャンルへの投稿をお待ちしています。そのほか、英文による特集の企画がありましたら、ぜひご投稿ください。

4. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山弘之)

梅棹忠夫初代会長の逝去を悼む

梅棹忠夫先生が 2010 年 7 月 5 日に亡くなられた。梅棹先生は 1985 年に日本中東学会が発足して初代会長に就任され、1991 年度に事務局長であった板垣雄三先生にバトンタッチされるまで、日本中東学会を代表する顔であった。梅棹先生が初代会長に就任されたのは、中東が石油という資源を通して日本社会にとっていかに死活的な役割を果たしているかという認識が一般の人びとに広がった時期であった。すなわち、1973 年に第 4 次中東戦争が勃発して、日本では「石油ショック」と呼ばれる危機的な事態が現出し、ようやく中東を知らなければならないという機運が生まれた。そのような状況を受けて当時、国立民族学博物館館長であった梅棹先生を団長とする文化ミッションが中東諸国に派遣されて「国立中東研究所」設立の提案がなされた。その提言が板垣先生のご尽力も相まって日本

中東学会の設立につながったのである。

梅棹先生のイスラームとの接点はおそらく戦時中の西北研究所時代であろう。同研究所は 1944 年に今西錦司所長（後に京大教授）の下に中国の張家口に設立された。張家口はムスリムの多く住む中国西北地域への入口にあった。その張家口には回民女塾があり、塾長の是永章子氏が中国の回族の女子教育にあたっていた。先生はこの女塾の是永氏を個人的に知る数少ない一人だった。この時代のフィールドワークが戦後、京大カラコルム・ヒンズークシ探検隊の調査によってアフガニスタンにまで至り『モゴール族探検記』（岩波新書、1956 年）に結実した。もちろん、梅棹先生を一躍論壇の寵児にしたのが 1957 年に『中央公論』誌上に発表された論文「文明の生態史観序説」である。それは後に『文明の生態史観』（中公叢書、1974 年）として一冊の本にまとめられ、後の「梅棹文明論」の原型となった。また、ベストセラーとなった『知的生産の技術』（岩波新書、1969 年）は情報化時代を先取りするものだった。先生の残した膨大な業績とその足跡は『梅棹忠夫著作集』全 22 巻と『梅棹忠夫著作目録 1934-2008』に記されている。1994 年には文化勲章を受章した。

言うまでもなく、私自身は梅棹先生の活躍を、同時代的に知っていたのではなく、そのずっと後に、先生の経歴を追体験的に辿って知りえたに過ぎない。私は 1995 年に国立民族学博物館（民博）に付設された地域研究企画交流センターに赴任し、それから 10 年弱、在籍した。その間、民博の顧問であった梅棹先生とわずかではあったが接することができた。何度かシンポジウムや午餐会という民博友の会の行事などの機会にご一緒した。梅棹資料室と呼ばれていた民博内の部屋に数度お伺いしてお話を聞いたこともあった。梅棹先生は個人的には、アッラーと人間とが直接対面するイスラームに対して親近感を抱いていた。先生は自分が改宗するのであればイスラームだとしばしば口にしていたことにもあらわれている。最後に、梅棹先生の逝去に心より追悼の意を表したい。

（臼杵陽）

理事会報告

諸般の事情により、2009 年度第 3 回理事会報告を前号のニューズレターに掲載することが出来ませんでした。遅くなりましたが、今号に報告を掲載いたしますので、ご確認ください。（事務局・ニューズレター担当）

【2009 年度第 3 回理事会報告】

日時：2010 年 3 月 20 日（土）15:00～18:00

場所：早稲田大学 9 号館 9 階 917 号室

出席：長澤栄治会長、青山弘之、臼杵陽、小杉泰、小松久男、店田廣文、東長靖、三浦徹

欠席：*赤堀雅幸、*大稔哲也、*加藤博、*栗田禎子、*黒木英充、*桜井啓子、*山岸智子、山口昭彦（*印は委任状あり）

[議題]

1. 第 26 回年次大会準備状況
2. 第 27 回年次大会開催校（京都大学での開催を承認した）
3. WOCMES,AFMA,国際会議関係
4. 編集委員会報告（編集報告・印刷業者変更を承認した）
5. 財務担当報告（会則改正の件。次回理事会に再提案）
6. 公開講演会報告（09・10 年度）
7. 地域研究学会連絡協議会報告（小杉理事は渉外理事から解任）
8. ニュースレター報告
9. その他（事務局のアルバイト時給を上げることがを提案（現在、930 円）。議論の結果、1000 円、1250 円と 1500 円の 3 つの時給体系とすることを承認した。AJAMES の編集補助は、1000 円とする。）

会員の異動

【新入会員】

五十嵐 小優粒

内田 優香

大竹 茂

佐藤 寛和

園中 曜子

徳永 恭子

藤本 透子

二ツ山 達郎

Mohammad
Qasim
Wafayezada

【所属先・連絡先の訂正・変更】

相島 葉月

飯田 巳貴

岡 真理

小野 亮介

金谷 美紗

熊倉 和歌子

澤井 一彰

篠田 知暁

鈴木 啓之

竹内 ゆかり

中西 久枝

中野 愛美

夏目 美詠子

山田 幸正

吉川 洋

吉村 武典

和気 太司

吉村 武典

斎藤 剛

水谷 周

江崎 智絵

谷川 浩也

水口 章

【2009年度末をもつての退会者】

安部 雅人、新井 一寛、飯村 直樹、伊藤 美智江、伊藤 祥子、猪原 渉、
上原 唱、大島 圭子、小野沢 透、北村 高、木下 宗篤、黒田 努、澤畑 剛、
佐伯 彩、染矢 文恵、田辺 勝彦、谷 正人、東間 史歩、中川 喜与志、長
渡 陽一、七尾 健太郎、沼田 敦、花田 宇秋、林 佳恵、藤田 進、丸山 直
起、森 千香子、森広 泰平、八木橋 正之、ギュレチ・セリム・ユジェル、Ali
Abdullah Alkahtani, Khan Muhammad Azhar, Taef Kamal el-Azhari, Tarek Chehidi,
Aysegul Komsuoglu, Rochmat Saefur

【物故者】

梅棹 忠夫

松本 光太郎

寄贈図書

【単行本】

菅瀬晶子『新月の夜も十字架は輝く—中東のキリスト教徒』山川出版社、2010年

松本ますみ『イスラームへの回帰—中国のムスリマたち』山川出版社、2010年

鷹木恵子（編著）『チュニジアを知るための60章』明石書店、2010年

店田廣文・岡井宏文『日本のモスク調査1・2—イスラーム礼拝施設の調査記録・合本』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室、2010年

【逐次刊行物】

『現代の中東』No.47 アジア経済研究所、2009年

『季刊アラブ』No.133,134 日本アラブ協会、2010年

『東方学会報』No.98 財団法人東方学会、2009年

『日本サウディアラビア協会報』No. 224 日本サウディアラビア協会、2010年

『日本クウェイト協会報』No.224 日本クウェイト協会、2010年

『地域研究』第10巻第2号、京都大学地域研究総合情報センター、2010年

『アジア農村の環境・エネルギー問題』国際地域研究所叢書第24号、日本大学生物資源科学部国際地域研究所、2010年

『アラブ・イスラーム研究』第8号、関西アラブ研究会、2010年

『一神教学際研究 *JISMOR Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions*』5、同志社大学一神教学際研究センター、2010年

『一神教世界 *The World of Monotheistic Religions*』第1巻、同志社大学一神教学際研究センター、2010年

『民族紛争の背景に関する地政学的研究』Vol.12、「コトバと記憶—第3回国際シンポジウム報告書」大阪大学世界言語研究センター、2010年

『民族紛争の背景に関する地政学的研究』Vol.13、「平成21年度報告書」、大阪大学世界言語研究センター、2010年

『考古学が語る古代オリエント—第17回西アジア発掘調査報告会報告書』日本西アジア考古学会、2010年

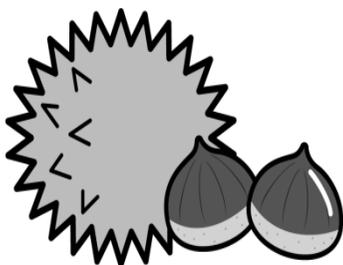
Bulletin of the School of Oriental and African Studies, vol. 73, no.2,

Cambridge University Press, 2010.
Journal of the American Research Center in Egypt, Vol. 45, The American Research Center in Egypt, 2009.
Perceptions: Journal of International Affairs, vol. XIV Number 1-2, The Center for Strategic Research (SAM), 2009.
News letter, No.80, OIC Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2009.

事務局より

第13期事務局の仕事もあと半年ほどとなりました。早稲田事務局にとっては、これから最後の山場を迎え、役員選挙や名簿作成といった初めて取り組む業務に加えて、来年度の総会・大会に向けて、気の抜けない仕事如山積しています。理事や評議員をはじめとする会員の皆様のご協力が欠かせませんので、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

前号で、既にお知らせしておりますが、会員会費特例規程が、本年度の総会において制定されました。施行は、2011年4月1日からです。2012年度分会費から、本規程は適用されます。詳しくは、ニューズレター121号の16～18頁をご覧ください。このことについては、次号123号において主要記事の一つとして掲載し、該当する会員への周知を図る予定です。



本学会ではメールリングリストによるメール配信が行われており、研究会・催しや学会からのお知らせに利用しております。メールアドレスを学会に登録しているにもかかわらず、お知らせ等がここ数ヶ月届いていない場合には、アドレスの不具合によるものと思われます。お手数をおかけしますが、配信可能なメールアドレスを事務局宛にお知らせ下さい。また、会員の中には、メールアドレスを登録していない、または何らかの事情で登録漏れになっているケースがあり、メール配信を受け取っていない方々もいます。

事務局からの連絡手段として、全会員のメールアドレスは完備したいと考えていますので、是非ともアドレスをお知らせいただければ幸いです。同時に、名簿へのメールアドレス掲載可否についても、お知らせいただければ幸いです。

(店田廣文)

訂正文

前号のニューズレター121号に一部誤植がありましたので、訂正します。9 ページの中段。

誤：(会員数 700 名、定足数 5 分の 1 の 140 名により総会成立)

正：(会員数 694 名、定足数 5 分の 1 の 139 名により総会成立)

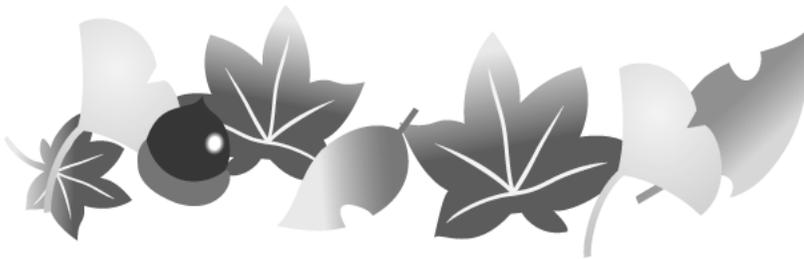
(事務局)

編集後記

ニューズレターの前号(no.121)に理事会報告を記載し忘れる、という大失態を起こしてしまいました。この場を借りて会員の皆様にお詫び申し上げます。この号では、講演会の詳細な内容と国際会議への参加報告をたくさん掲載することができ、秋に出すニューズレターとしては異例に大部なものになりました。報告文をお寄せくださった執筆者の皆様に御礼申し上げます。しかしそれでも、報告文をお願いできなかった参加者の会員の方がまだいるわけですから、今年度の学会としての国際交流の充実ぶりがよくおわかりいただけるかと思えます。

さて、次の評議員選挙の準備が始まり、任期の終わりが見えてきました。もうひと頑張り、皆様のご協力をさらにお願ひ申し上げます。

(山岸智子)



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2011 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2010 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。また、第 14 期役員選挙での投票を行う正会員の方や、2011 年 5 月の京都大学における年次大会での研究発表や AJAMES への論文投稿を予定されている会員の方は、是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は 2010 年 10 月末日の入金確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第122号

発行日 2010年11月12日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地
早稲田大学 120-4 号館 3 階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付
日本中東学会事務局

電話/ファクス：03-5286-1966

Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 長沢 栄治)